

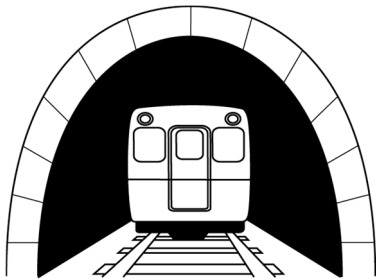


“学びの森”だより



まさか

音楽で、北原白秋の「待ちぼうけ」の授業がありました。歌詞の意味や曲の感じをつかむ授業です。歌詞の意味は、農夫が畑仕事をしていると、ウサギが木の根っこにぶつかりました。思わぬ獲物を得た農夫は、次の日から畑仕事をやめ、毎日寝転がって、ウサギが木の根っこにぶつかるのを楽しみにしていました。しかし、二度とそのようなことは起こらず、田畑は荒れ果て、笑いものになったという話です。「楽をして得てはいけない。」と言いたかったのでしょうか。しかし、この曲が作られた後、戦争の勝利という成功体験に酔った日本軍が、無謀にも戦線を拡大していきました。人間の悲しい性でしょうか。



この授業を見て、私自身の体験が頭をよぎりました。重たいザックを背負って、紀伊半島の熊野古道の山々に登りに出かけたときです。登るときに峠をいくつも越えましたが、あまりにも疲れたので、帰りは楽をしたいと、紀勢本線のトンネルを抜けようと考えてしまいました。もちろん時刻表で、列車が通過するかどうか確認しました。地図からすれば、次の列車が来るまでに抜けられそうでした。妙な自信を持ってトンネルの中に入り、かなり進んだときです。「カタン、カタン。」と音が聞こえたような気がしました。まさか・・・、もう一度時刻表を見ました。今月号です。気のせいだと思いました。「ガタン、ガタン。」ますます音が大きく響いてきます。走るしかない。しかし、石ころだらけのトンネルは、思うように走れません。カーブを曲がってきた列車のヘッドライトに照らされました。とてつもない警笛が鳴り響き、もうだめだと感じました。古い単線のトンネルはあまりにも狭く、待避所もほとんどありませんでした。こうなったらトンネルの壁に体を押しつけ、かわすしかないと考えました。しかし、体を壁にくっつけば、背中ザックが列車に引っかかり引きずられるかもしれない、ザックを捨てる時間もない、怖いけれど逆しかない。背中ザックを壁に押しつけました。すさまじい風と音が、目の前を通過していきます。1両2両、どうか仏様・・・必死に拝みました。真っ暗なトンネルに赤いランプが近づいてきました。テールランプだ、よかった。「ふっ」と力が少しだけ抜けたのかもしれませんが、「ガツン」と思いきり何かが鼻にあたりました。鮮血が落ちていくのが分かりました。高くもない鼻なのに、きっと、車両が顔ぎりぎりでも通過していたのでしょうか。もっと息を抜いていたらと思うと、震えが来ました。もちろん、今ここにいません。それにしても、なぜ列車が？（答えは、裏面にて。）

待ちぼうけではありませんが、「楽をして得てはいけない。」ことでした。しかし、人というのは懲りない（私だけかもしれませんが）ものです。鼻の傷が癒えていくうちに、またしても、煩惱が・・・今度は、鉄橋です。トンネルと違い、見通しがききます。この長さならと思い渡り始めました。途中まで来たとき、背後からいやな雰囲気を感じました。まさか・・・後ろを振り向くと、なんと列車が来るではありませんか。予想以上に速いスピードで、ぐんぐん迫ってきます。枕木の上を走りました。しかし、規則正しい枕木は、全速力で走れないものです。またしても、もうだめだと感じました。飛び込むしかありませんでした。今思えばとんでもない迷惑をかけていました。まだまだ修行が足りません。そして、待ちぼうけの意味が心にしみました。（文責 松山充彦指導員）

